

3 キャベツのハイマダラノメイガの防除技術

ねらいと成果

ハイマダラノメイガはキャベツの生育初期に生長点を加害する。被害株は芯止まりを起こすため結球しなくなるので致命的な被害になる。県内のキャベツ産地では数年前から多発生状態が続いているが、キャベツのハイマダラノメイガに登録のある薬剤は少なく、その防除効果も不十分で防除対策に苦慮している。

そこでクレオメ（フウチョウソウ科の草花）を誘致植物とした発生予察法を確立するとともに、防除技術として育苗期のネット被覆、キャベツ害虫に登録のある薬剤を使った定植時処理（カルタップ水溶剤等、表2）、本田生育期の薬剤散布（PAP乳剤等、表3）の防除効果が高いことを明らかにした。

内容

1 クレオメを利用した発生予察法

クレオメの被害株率とキャベツでの被害株率には、相関がみられた。さらにクレオメの被害株率×0.4がキャベツの被害株率の目安となることがわかった。例えば、クレオメの被害株率が50%のとき、キャベツでは株率で20%の被害がでると予測できる。

2 育苗期のネット被覆の防除効果

目合い0.8mmまたは2×4mmのネットによる育苗期の被覆は、薬剤散布なしでも被害をきわめて低く

抑えることができた（表1）。

3 定植時の薬剤処理の防除効果

カルタップ水溶剤の定植時散布の効果は高く、半月程度の持続効果が認められた。ベンフラカルブMCの散布及びアセタミプリド粒剤の株元散布も高い防除効果が認められた（表2）。

4 本田での薬剤散布効果

PAP乳剤、ルフェヌロン乳剤、スピノサド水溶剤には約2週間の優れた防除効果が認められた。クロルフェナピルフロアブル、エマメクチン乳剤の効果は8日間程度であった（表3）。

普及上の注意事項

- 1 クレオメは畦際かプランターに50株程度植えてときどき寄生株率を調べる。
- 2 夏期の薬剤処理は高温乾燥のため薬害が生じやすいので、灌水などして配慮する。特にカルタップ剤は薬害を生じやすい。
- 3 目合0.8mmの防虫ネットを育苗期被覆すると、展開葉がやや多くなる傾向がある。目合2×4mmのものはコナガやキスジノミハムシに効果が劣るので、これら害虫の発生に応じた防除が必要であるが、被覆したまま灌水、薬剤散布ができる利点がある。

八瀬 順也（病害虫防除所）

表1 育苗期ネット被覆の防除効果

処 理	寄生株率(%)
サンサンネットGN-2300(0.8mm)	0
サンサンネットN-3800(2×4mm)	0
被覆なし 薬剤防除あり*	0
無処理(被覆、薬剤防除なし)	32

*DDVP, ランネット, ハダダ, エルサン の順で約4日おきに散布

表2 定植時苗処理薬剤の防除効果

薬剤名	施用量	処理方法	防除価*	
			10日後	15日後
カルタップ 水溶剤	1500倍・1・/トレイ	散布	100	88
ベンフラカルブ MC	100倍・500・/トレイ	散布	100	57
アセタミプリド 粒剤	0.5g/株	株元散布	91	53
アフェイト粒剤	1g/株	株元散布	73	58

*無処理区の寄生株数を基にした値

表3 定植後散布薬剤の防除効果

薬 剤 名	希釈倍数	防除価*		
		5日後	8日後	14日後
PAP乳剤	1000	-	100	100
ルフェヌロン乳剤	3000	-	100	100
スピノサド 水溶剤	5000	-	100	93
クロルフェナピルフロアブル	2000	82	90	70
エマメクチン乳剤	2000	82	90	52
クロルフェナピルフロアブル 水溶剤	3000	91	73	26
プロチオキサリド水溶剤	1000	91	58	9
アセタミプリド 水溶剤	2000	91	53	0
メソメ水和剤	2000	55	5	0
DDVP乳剤	1000	9	11	0

*無処理区の寄生株数を基にした値